

東と弁往來

第8回

能代ひまわり基金法律事務所



秋田県能代市

会員
有坂 秀樹 (56期)

2003年10月弁護士登録、東弁入会。
1年6ヶ月の鍛錬を経て、2005年4月から2006年5月まで
2年1ヶ月間、秋田弁護士会に登録換えし、能代ひまわり基金法律
事務所の初代所長を務めた。2006年6月から、東弁に復帰。

1. ひまわり公設事務所の任期満了後、元所属事務所であるすばる法律事務所に戻られた理由をお聞かせ下さい。

東京にそもそも戻ったのは、東京出身の妻子を東京に置いての単身赴任であったことが一番大きな理由です。赴任元事務所に戻ったのは、有り難いことに、ボスの林史雄先生との話し合いで元々赴任後戻る約束で就職させていただいていたことと、戻る年(平成19年)にボスがイソ弁のいない状態で東弁の筆頭副会長に就任し平日ボスが事務所にはいない状態になってしまい当職が戻る必要が高かったためです。

2. ひまわり公設事務所赴任期間の弁護士活動と現在の東京でのそれとで、ギャップを感じる点がありますか？

能代支部のときと比べて、東京本庁では求められる弁護士会の委員会活動の量も格段に多いです。また、裁判所も検察庁も格段に大きく大量処理を前提としているためか、裁判官・検察官・書記官・事務

官との距離が遠く継続的な関わり合いが薄く感じます。また自治体の職員に接する機会もほとんどなく一弁護士として行政と連携をとることがとても難しく感じます。

3. ひまわり公設事務所赴任期間の活動を振り返って、こうしておけばよかったと思われる点がありますか？ また当会からこんな支援があればよかったと思われる点がありますか？

事務員の残業対策、福祉関係の行政機関との連携不足など、課題を残した状態で任期を終えることにはなりましたが、後任弁護士への引継ぎ・助言や後任自身の工夫によりすでに改善がなされつつあります。他方、当会での支援については、養成中の新人弁護士のボスの弁護士会法律相談への同席、赴任中の弁護士への帰任時の東京での相談や国選等の登録方法などの情報の提供、東弁会員への赴任弁護士か

らの情報発信（この連載のことです）など、自分が赴任当時あればよかったと思っていたことは、私の属する東弁の下記委員会での当職の発言や活動により既にかなり実現されています。

4. 東京に戻られてからの、当会での活動状況を教えてください。

東弁で赴任前から所属していた法律相談センター運営委員会で副委員長をしています。選択修習の模擬法律相談や受任審査も担当しています。東京法律相談連絡協議会（東京三会の協議会）の島嶼部^{とうしやうぶ}部会の部会員となり、東京の過疎地の伊豆諸島での相談の運営に関わっています。また赴任後に公設事務所運営特別委員会の過疎地派遣バックアップ部会の部会員となり、東弁から弁護士過疎地等に赴任するひまわりやスタッフ弁護士の養成や赴任後の支援に関わっています。日弁連でも公設事務所法律相談センターの事務局となり弁護士過疎偏在解消に関わっています。都合月に約13の会議に出席しています。また当会の活動というわけではありませんが、多摩支部も含めた当番・国選、弁護士会や法テラスの相談担当となり、法律扶助の審査員をしたり、法テラスコールセンターのテレフォン法律アドバイザー（TA）として日本全国の人に情報提供をしたりもしています。

5. ひまわり公設事務所での執務経験を東京でどのように生かされていますか？

能代ひまわりでの事務員の教育やクレサラ事務処理等の改善、労務管理などの経験を赴任元事務所にフィードバックして活かしています。また、能代での多重債務も含めた消費者講義や市民向け講座、自治体職員との連携をする際に培った経験を、東京の生徒や自治体職員への講義をする際に活かせてもいます。また東弁や日弁連で公設事務所の支援をする際にも小規模単位会・支部会員・弁護士過疎地の住民



としての感覚や支部での裁判所の運用の感覚を踏まえた発言を各種委員会で心懸けています。

6. 弁護士としての今後の展望についてお聞かせ下さい。

弁護士が2人しかいない能代で膨大な種類と数の法律相談や事件を処理しましたが、東京に戻ってきて労働・生活保護・消費者・交通事故相談などの専門相談を担当してみると、経験済みの相談も多々ありつつも、未経験の分野の相談にあたることもよくあります。登録6年半でまだ10年にも満たない若手弁護士に過ぎませんので、専門分野をしぼり過ぎることなく外国人や子供、医療の問題等様々な分野に挑戦し、実力を備えたマチ弁として成熟できるよう頑張っていきたいと思います。

7. 今後当会からひまわり公設事務所へ赴任する会員に向けてアドバイスをお願いします。

まだまだ弁護士過疎地（刑事・扶助の事件過疎地も含みます）では弁護士の援助を求めたくても求められない住民が多くいます。集中して研鑽に努めて、過疎地で最低限求められる力を蓄えつつ、東京にいるときから様々な会合に出席して構築した諸先輩方とのつながりを活かして、過疎地の住民に対して、自分1人の能力以上の成果を出せるように、今のうちから頑張ってみるとよいと思います。